琉球大学学術リポジトリ

冊封使に供された組踊「孝行の巻」に関する一考察：演戯故事に記された組踊の内容と周辺史料の比較を通して

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2017-12-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 我部, 大和, Gabu, Hirochika メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/37389

『国際琉球沖縄論集』第6号
2017年3月

【研究論文】

冊封使に供された組踊「孝行の巻」に関する一考察
—演戯故事に記された組踊の内容と周辺史料の比較を通して—

我部　大和*

A Study of "Kōkō No Maki" - Kumiodori Play Performed for China Envoys, through the Comparison of Its Description in "Engikoji" and Related Historical Records.

GABU Hirochika*

要旨

本稿では、組踊「孝行の巻」について演戯故事に所収されている内容と組踊台本の詞章、冊封使録3篇との比較を中心に考察を行った。

記述内容の比較を通して、組踊「孝行の巻」については、演戯故事の物語前段にも見られるように、首里王府が風水害の続く状況を孝行な娘が国の窮状を助けることを主題として設定していることがわかる。また、演戯故事は解説書として写実的に記された内容であり、組踊台本の演出を補完する役割をもっていた。そこには琉球が中国からもたらされた儒教を受容する「恭順」な国家であることを組踊の演出で伝え、さらに冊封使録に組踊の内容を記させることで皇帝に対して、琉球の「恭順」な国家像を見せようとする王府の施策が窺える。

Abstract

In this paper, Kumiodori "Kōkō no maki" is studied through the comparison of the play's script, its description in "Engikoji" and accounts in "Sappōshiroku". Kumiodori is a type of performance composed of songs, dance, and drama. It was performed as a welcome entertainment for the envoys of Qing dynasty.

Kumiodori script consists of characters' lines and stage directions, whereas "Engikoji" is a translation and explanation of Kumiodori, as well as Ryukyuan dances into classical Chinese, written in the Ryukyu Kingdom. "Sappōshiroku" is a report written by China envoys while on their mission to Ryukyu.

*日本学術振興会特別研究員（琉球大学大学院博士後期課程）

Through the comparison of the three historical records it appears that the main theme of Kumiodori "Kōkō no maki" is the teachings of Confucianism. In description of "Engikoji", continuing winds and floods have resulted in great damage to the Ryukyu Kingdom and starvation of majority of its people. However, one faithful daughter managed to save the country from its hardships.

"Engikoji", while being a realistic and explanatory supplement to the Kumiodori script, shows the acceptance of the teachings of Confucius in the Ryukyu Kingdom. Therefore, we can assume that the China envoys, who recorded the performed Kumiodori topics in detail, would convey the "allegiance" to the Qing dynasty, messaged by the Ryukyu Kingdom.

はじめに

冠船芸能とは、首里王府が中国から来琉した冊封使の歓待と国王即位を祝福するために創作され、上演された芸能のことである。冠船芸能の中で、演じられた演目に組踊がある。組踊は、1719（康熙 58）年尚敬王冊封の際、踊奉行に任命された玉城朝薫によって創作された台詞を主として歌曲と舞踊を組み合わせて一組にまとめた形式の歌舞劇である。その後、組踊は中国から訪れた国王即位儀礼を取り仕切る冊封使歓待の宴で数多く演じられている。組踊や琉球舞踊を演じる際に、組踊の詞章や琉球舞踊の歌詞はすべて琉球語（主に首里の士族語）であった。そのため、冊封使にとって難解であった。そこで王府は、冊封使に組踊や琉球舞踊の内容を理解してもらうために、琉球舞踊の歌詞や組踊の内容を漢文訳した解説書を作成した。それが演戯故事である。

本稿では、演戯故事に記された組踊の中から、1838（道光 18）年の尚育王冊封の際に、重陽宴で上演したとされる組踊「孝行の巻」を取りあげる。

「孝行の巻」については数種の台本と「戊戌冊封諸宴演戯故事巻之六」（尚家文書第 126 号、1838 年）に「孝感除蛟姉弟興家」（「孝行の巻」）として漢訳された演戯故事が存在する。

本稿において、紙幅の関係上全ての内容を網羅的に記述することはできないが、演戯故事に記された内容と組踊台本の詞章及び冊封使録の記述など周辺史料を用いて、冠船芸能における組踊の演出意義について比較検討を試みたい。

1．「孝感除蛟姉弟興家（孝行の巻）」について

1-1　「孝感除蛟姉弟興家（孝行の巻）」の作者・創作年代・上演状況

「孝行の巻」の作者は 1719（康熙 58）年の尚敬王冊封の際、踊奉行に任命された玉城朝薫である。上演状況について［国立劇場おきなわ調査養成課 2007］［独立行政法人日本芸術文化振興会　公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団 2014］によると、近世琉球では冊封が行われるごとに上演したとされる。近年においても、1972（昭和 47）年に東京の国立劇場での上演を皮切りに、国立劇場おきなわなどで数多く上演されている。

1-2「孝行の巻」の組踊台本・あらすじ

「孝行の巻」において現存する組踊台本は、以下の6種を確認することができる［国立劇場おきなわ調査養成課 2007］。

(1) 琉球大学附属図書館所蔵本『組踊集』「孝行之巻」1883年。
(2) 兼島信備所蔵本『組躍集』中「孝行ノ巻」1906年。
(3) 伊波普猷『校註琉球戯曲集』「孝行之巻」1929年。
(4) 田島利三郎本『語學材料　第二』「孝行ノ巻」1894年。
(5) 田代安定本「孝行の巻」書写年代不明。
(6) 山城徳助本『琉球脚本組踊集』下巻1920年。

あらすじ

登場人物：男子、姉、母、頭取、時の大屋子、供（一）、供（二）［伊波　1929：p254］

頭取が登場し、「むろけ（ムルチ）という池に大蛇が住んでおり、風雨を起こして、家屋や農作物に被害を与えており、農民を苦しめている。大蛇の怒りを鎮めるために十四、五歳頃の子どもを人身供養にする必要があり、生贄となる者を募ることとする。生贄となった者には、その親類縁者の生活を保障することを約束する。この内容の高札を立て、希望者を募ることにする」と供に高札を立てさせる。

父親に先立たれた女子と男子（姉弟）が登場する。姉弟は母親を養うために、落ち穂拾いをし、その日暮らしをしていた。その道すがら、弟は高札の内容を見つけ、姉に伝えた。姉は弟を説得し、生活を救うために自らが生贄になることを決心する。姉弟は母に対し海へ潮汲みに行くということを口実に外出を願い出た。母は外出を許可し、姉は頭取の元へ行き、生贄となることを志願する。

姉は頭取と時の大屋子と共にムルチへ行き、祭壇に上がり生贄として自らの身を捧げる。大蛇が立ち現れ、姉を喰おうとする。その時、「孝感滅蛇」の四字の旗をふるう神が現れ、大蛇を皮肉分散させて姉は助ける。

姉が生贄になったことを知った母は、弟に姉を生贄にしたことを叱る。母は弟を連れて、自らも身投げしようとムルチへ向かう。頭取一行は、姉を連れて首里へ向かう。その道すがら親子の再会を果たし、娘の孝行な心に感心した王府は褒賞として、姉を王妃に、弟を王の娘婿として迎えること、を母親は頭取から告げられる。母子は頭取へ感謝し帰る。

1-3　「孝行の巻」に関する研究状況

「孝行の巻」に関する研究は、能との比較研究として［真境名安興　1928］により、謡曲「田村」[1]との比較が行われ、また［畠中敏郎　1976］［矢野輝雄　2003］によって、謡曲「大蛇」[2]や「張良」[3]、古浄瑠璃「いけにえ」との構成が類似していることから、「孝行の巻」が謡曲や古浄瑠璃などの影響を受けたことが指摘されている。

「孝行の巻」の演出に関しては、［仲吉　1972］［矢野　2003］により、1972（昭和

47）年3月24・25日に東京国立劇場での「孝行の巻」の演出において、①池がないこと②大蛇が火を噴かないことから古典無視であると批判し、冠船芸能で行われた演出の古典回帰を求める指摘がなされている。

台本研究においては、［末吉　1928］により、「孝行の巻」の詞章の特徴として、対句表現の多用を取り上げ、［矢野　2003］が冗長化したとしている。一方、大城學により、「孝行の巻」のほか「銘苅子」においても対句表現が多用されることから、「朝薫の組踊作劇の手法」［大城　2000：p283］として対句が多用されており、矢野の指摘する冗長化したとする指摘はあたらないとしている。

また、主題の研究では［矢野　2001］が親子の情愛と親への孝行が表現されているとし、さらに［犬飼公之　2004］は、「孝行の巻」の［矢野　2001］の指摘に加えて、登場人物などで農民や士族の困窮・疲弊といった世相を詞章により窺い知ることができると述べている。

演戯故事との関連については、［畠中　1976］による冊封使録に記されている「孝行の巻」の記述は、演戯故事を参照したものであろうといったことが指摘されていたが、畠中が新聞に寄稿した当時は、尚家文書が未だ公開されておらず、その演戯故事を「幻の書」としていた。その後、尚家文書が公開されると［矢野　2001］でそれを閲覧し、演戯故事に記されている内容から「孝行の巻」では、「忠」「孝」が主題であり、儒教意識が如実に現れていると指摘している。

以上、先行研究では、日本芸能との比較や演出・詞章、主題に至るまで多くの論考が上梓され、特に能や古浄瑠璃等との比較研究により、「孝行の巻」が創作される際に影響を受けた点が注目される。一方、上記の研究により「孝行の巻」が儒教倫理に則した内容になっていることも判明する。矢野の指摘した儒教意識については詳細な分析がなされておらず、儒教倫理については、演戯故事でどのように表現されたのか。また、組踊台本ではどのように表記されているのか。具体的な検討が必要となろう。さらに、冊封使は上演された組踊をどのように冊封使録に記録したのかといった問題についても考察が必要である。

2．「孝行の巻」における演戯故事と組踊台本との内容比較

2-1「孝行の巻」における義本王―演戯故事と周辺史料との比較を中心に―

「孝行の巻」の登場人物において、管見の限り国王は登場しない。まず組踊台本の冒頭において、王府が民から生贄を募集する場面では、頭取が登場する。その詞章では、天災が続く状況や時の占方にもたらされた神託について、以下のように述べている［伊波普猷　1928：pp.256―258］。（【　】は筆者により現代語訳したものである。なお、／＼は踊り字をさす。以下同じ。）

むろけてる池に大蛇棲で居とて、風の根も絶えらぬ、雨の根もたえらぬ、屋蔵吹崩ち、原の物作も根葉枯らち置けば、こぞことしなてや首里納めならぬ那覇納めなら

ぬ、御百姓のまぎれかつ死に及で、御願てる御願たかべてるたかべ肝揃て立てゝきもそろて願て、時の卜方も神のみすゞりも十四五なるわらべ蛇の餌食かざて、おたかべのあらば御祭のあらば、おにきやらやほこてまたからやほこて、作る物作も時々に出来て、御祝事ばかり百果報のあむで、みすゞりのあもの、御主加那志御為御万人の為に命おしやげらば、なし親やだによ引はらうぢ迄もおの素立めしやいるおよす事拝で、高札にしるち、道々に立てゝ、道々に置きゆん。心あるものや心付くものや肝揃て拝め、肝とめてをがめ。高札よ高札よ立てやうれ／＼

【むろけという池に大蛇が棲んでいて、絶えず風をふかし、雨も絶えず降っている。家屋も風で吹き崩して、田畑の作物も根こそぎ枯れてしまった。去年も今年も、首里への上納もできず、那覇への上納もできない。百姓の多くは、飢え死してしまい、祈願という祈願、お崇べ（神への祈願）を、心を一つにして心をあわせて願い、時の占方も神のお言葉も、十四、五歳の子供を蛇の餌食として供え、神への祈願をすれば、その後は誇ってこれからも良くなり、作る農作物も時期ごとに実り、御祝い事ばかりの果報があるという神託である。心ある者は、国王の為に民の為に命を捧げれば、親のみならず一族一門までお取り立てするという仰せをいただき、高札に記し道々に立てて道々に置く、心のある者は気の付く者は、心をあわせて拝み、心に留めて拝みなさい。高札を立てなさい。】

「戊戌冊封諸宴演戯故事巻之六」（尚家文書第 126 号、1838 年）では、以下の通り記されている。

昔中山府義本王之世毎年数十次暴風驟起暴雨屡沛五穀草木為風雨所傷饑饉頻加萬民憂苦國王各官無計可施陰陽筮卜皆曰近年北谷縣無漏溪有大蛟生而風雨為之暴起宜用犠祭之必免暴風之憂然而生犠必須用小童以祭之若非小童亦用小女可也王嘆曰孤為民治世豈可忍以人而為犠哉孤可自備生犠之用各官奏曰準陰陽家必可用小童以祭惡蛟今王自備犠供亦何有益乞傳檄文通知各處人民若有為國棄身者必須萬金以報其功王允其議急教檄文傳到各處張掛

【昔、中山の義本王の治世に毎年数十回も暴風雨が起きていた。五穀や草木は風雨で損なわれてしまい、飢饉が頻繁に起こり、万民が苦労した。国王と重臣たちは、（暴風雨の）対策を施すことが出来なかった。陰陽家が占うと、「近年北谷間切のムルチに大蛟が生きており、これ（蛟）が暴れることで、風雨が起きてしまっているのです。（風雨を治めるためには）生贄を祭るのがよいでしょう。これ（生贄）を祭れば暴風の恐れから免れられるでしょう。（生贄は）子どもを奉ってください。もし男児でなければ、女児でも良いでしょう。」と言った。王は嘆き、「私は民のために世を治めていたが、どうして人を生贄にするのを許すことができようか。私を生贄に用いた方が良い。」と言った。重臣たちは（国王に）上奏して、「陰陽家（の進言）にのっとって、必ず子どもを以て、忌わしい蛟に奉ってください。今、王を生贄に供えても、

また何の国益がありましょうか。檄文で各所の民に知らせましょう。もし、国のために身を捨てる者がいれば、必ずその手柄として大金を報酬として孝養すべきであります。」と言った。王はその事（身を捨てた者への孝養を）許し、いち早く檄文で伝えさせ、各所に張り掛けた。】

演戯故事では、冒頭で「中山府義本王之世」と記し、国王に関する記述がある。また冊封使録である徐葆光『中山伝信録』や周煌『琉球国志略』でも「宋淳祐中義本王」［黄薛　2000：p336・p1122］と時代設定は義本王とされている。『中山世譜』では、義本王が即位した際に、風水害が起きたことは記されているが、「孝行の巻」と類似した記述は記されていない[4]。また、『遺老説伝』では、屋良ムルチ伝説における内容が記されているが、義本王の治世とする記述はない[5]。

組踊台本ではなされなかった時代設定が『遺老説伝』の屋良ムルチ伝説と結合する形で、演戯故事と冊封使録ではなされている。冊封使録の記事は演戯故事の内容を参照して記録されたものとして見ていいだろう。以下、冊封使録で紹介された義本王の治世について見てみたい。

徐葆光『中山伝信録』巻三「中山世系」の「義本」の項では、以下のように記されている［『國家圖書館藏琉球史料匯編』　2000：p195］。

義本　宋淳祐九年巳酉義本嗣位
義本舜馬順熙第一子開禧二年丙寅生四十四歳嗣位其明年國中大饑次年疾疫人民半失君歎息召群臣曰饑疫并行不德誰讓群臣擧惠祖世嫡英祖君大悦召試國政擧賢退不肖疾疫止遂攝政七年義本讓位隱於北山在位凡十一年壽五十四歳
【義本　宋淳祐九（1249）年巳酉義本が位を継ぐ。義本は舜馬順熙の第一子で、開禧二（1206）年丙寅に生まれる。四十四歳に位を継ぐ。その明くる年国中に大飢饉、その次の年に疫病により人民の半分を失い、君主は歎息をつき、群臣を集め、「（私は）飢饉や疫病が起こり不徳を行っている。（王位を）誰に譲ろうか」といった。群臣は惠祖の嫡子である英祖を推挙した。君主は大いに悦んで、（英祖に）國政を行わせると、賢をあげ不肖を退けて、疫病がやんだ。ついに、摂政七年義本は譲位し、北山に隠居した。在位はおよそ十一年で、五十四歳で亡くなった。】

周煌『琉球国志略』巻二「國統」でも以下の通り記されている［『國家圖書館藏琉球史料匯編』　2000：p686］。

義本舜馬順熙長子開禧二年生淳祐九年立年四十四朞年國中大饑三年疾疫人民半失君歎息謂羣臣曰饑疫并行不德誰讓羣臣擧天孫氏後惠祖嫡孫英祖義本悦召試國政擧賢退不肖疾疫遂止攝政七年義本讓位退隱於北山在位十一年壽五十四
【義本　義本は舜馬順熙の長子で、開禧二（1206）年に生まれ、淳祐九（1249）年

四十四歳に位を継ぐ。その年国中に大飢饉、三年に疫病により人民の半分を失い、君主は歎息をつき群臣を集め、「(私は) 飢饉や疫病が起こり不徳を行っている。(王位を) 誰に譲ろうか」といった。群臣は天孫氏の後裔惠祖の嫡孫である英祖を推挙した。君主は大いに悦んで、試しに (英祖に) 國政を行わせると、賢をあげ不肖を退けて、疫病がやんだ。ついに、摂政七年で義本は譲位し、北山に隠居した。在位は十一年で、五十四歳で亡くなった。】

双方とも同様に、義本王の治世で飢饉や疫病が続いていること。そしてそれは国王の「不徳」によるもので、その後の英祖への禅譲があったことも記している。それと「孝行の巻」との繋がりについて、『中山伝信録』巻四「琉球地圖」に以下の通り記されている[『國家圖書館藏琉球史料匯編』 2000：p336]。

北谷　有無漏溪義本王當宋淳祐中溪中惡蛟興暴風雨爲患募童女爲犧祭之宜野灣章氏女眞鶴應募捨身養母孝感天神滅蛟除害王大喜以配王子
【北谷　ムルチがある。義本王が宋の淳祐年間、溪の中に悪い蛟が暴風雨を起こし、(琉球を) 患わせている。(そこで、) 童女を募った。犠祭のために、宜野湾の章氏の娘眞鶴が応募し、身を捨てて母を養う事に天の神が孝感し、蛟を滅して害を除いた。王は大いに喜んで王子に (真鶴を) 配した。】

「琉球地圖」では義本王の時代の淳祐年間に、悪蛇が暴風雨を起こして大きな災いをもたらし、それを鎮めるために童女が母親を養うために身を捨て生贄になるという「孝行談」へと結びついている。『中山伝信録』巻三「中山世系」の記述によると、義本王は淳祐 9 (1249) 年に即位し、その翌年に、飢饉が起き、その翌々年には、疫病が発生し、人民の半分を失ったとしている。童女が母親を養うために身を捨て生贄になる設定は、そうした状況下でなされている。そしてそれは孝女として国の災害を食い止め、その孝養として王子の嫁とした「美談」へと発展していく。

一方で、組踊台本においては演戯故事同様、風水害の状況やむろけという池に大蛇が棲んでおり、生贄を募ったというくだりは、頭取の詞章で語られている。そこには「正史」で語られているような、義本王淳祐年間といったの時代設定は見られない。災いが収まらない状況下で、演戯故事では国王と臣下の論議が記されている。その内容は、民を犠牲にせず「不徳」を致した自らを犠牲にしてほしいと願うが、重臣たちは国王の提案に反対し、陰陽家の進言にしたがい、民から生贄を募り祭祀を行う方針が決まっていった経緯が記されている。実際にあった琉球王国時代の災害時における祭祀について麻生伸一は王府が災害発生時に行う祭祀について「伊江親方日々記」で記された 1789 (乾隆 49) 年の天候不順に対する祭祀を行うかを議論した内容を分析し、国王の裁断により祭祀が決行された経緯を踏まえ、「災害発生を為政者の〈徳〉と結びつけて考える災異説の論理が琉球でも浸透している」[麻生　2013：p76] と指摘している。

演戯故事では、さらに王府の災害に対して国王と臣下の生贄を募るかどうかの葛藤が描出されている。そして、民衆の子を生贄にすることで災害が治まるとする陰陽家の進言に耐えきれず、国王が自らを犠牲にしたいとする為政者としての「不徳」で災害が起きた自責の念も、演戯故事には反映されている。

為政者の「不徳」に関しては、儒教の経典である『書経』堯典篇において、為政者は日々の天候などを観察し、民衆に対して農耕の時期を定めよ［加藤　1983：p22］とあり、天候不順そして民衆に農耕の時期を定められず不作となることが為政者の不徳であるという儒教倫理観が中国社会では根付いていた。演戯故事ではそうした為政者の「不徳」と「孝行」といった儒教倫理観が琉球へ伝播したことを冊封使に見せようとした王府の施策が窺える。また、史実と説話が結びつき、現実と幻想が結びつき、よりビジュアルな形でインパクトをもつ戯曲の創作に繋がっている。そうした内容の組踊を鑑賞した冊封使は、そこに中国化した属国の姿を見たことであろう。

2-2　生贄の儀式―演戯故事と周辺史料の比較を中心に―

組踊台本において姉は、生贄として願い出て儀式が行われる。その儀式について、「戊戌冊封諸宴演戯故事巻之六」（尚家文書第 126 号、1838 年）には、以下のように記されている。

前到北谷縣稟告供犠救民以受萬金以養老母等情縣官及家人皆莫不慘嘆流涙縣官便教覡司領真鶴前到無漏溪即教真鶴更衣為犠並設香花燭等物祭之只見溪上昏雲四生雪雹亂飛天響地應忽有一條大蛟翻波湧浪自溪中出来不知其身長多少一半蔵在波浪裏一半現在雲霧裡眼若朗星口吐烟火噛牙咬歯両目看着女子要飛来一口呑得女子忽聴天上一聲如砲女子擧首視之不知何物自碧空飛下来形圓如月色紅如火又有一声如砲其物綻解化為蓮花南斗壽星現立其上手揮黄旗一柄如叱大蛟仰看其旗面有孝感滅蛟四字女子及衆人叩首百拝只見大蛟低首屈身肉爛骨露遂化陣塵風而滅了衆人大喜曰誠是孝感之所致也即領女子回縣稟明此事

【北谷間切の前に着き、（姉は檄文を）受けて生贄となって、民を助け、万金（報奨金）を受け、老いた母たちを養う気持ちがあると告げた。間切の官吏と民は、皆痛ましくなげき涙を流さない者はいなかった。間切の官吏は覡司（時の大屋子）に真鶴を（引率させて）、ムルチの前に着いた。すぐに、真鶴を生贄にするため着替えさせて、また仏に備える香と花や蠟燭などを祭った。すると、池の上に暗い雲が四方に生まれ、雪と雹が乱れ飛んで、天と地に声が響きわたるように様子が変わるのを見た。突然、大きい蛟が一頭、波をひっくり返して池の中から出てきて、その体の長さはわからないが、（池を）半分おおうくらいで、波が大きく揺れた。雲と霧が眼の中にあって、口から出す火は、明るい星のようである。両目は女児を睨み飛んできて丸呑みしようとした。女児は、突然空からある大砲のような音を聴いた。女児が首を上げて、これを見ると、得体の知れないものが、青空から飛んで降りてきた。形は月の

ように丸く、色は火のように赤い。また、大砲のような音が一鳴りした。その物体が開くとはすの花に変わり、（そこから）南斗の壽星がたち現れて、その手に黄色の旗を一つ持って、大蛟に向かって怒るように振り回した。その旗を見上げてみると、「孝感滅蛟」の四字があり、女児と人民が頭を地に着けて、何度も拝していた。大蛟は首を下げて、体をかがめると、肉が爛れて、骨が現れて、ついに塵とかぜになって、なくなった。皆はとても喜んで、これは孝行が神を感動させたところによると言った。そこで女児を連れてすぐに、間切へ戻り、このこと（ムルチで起こったこと）を報告した。】

演戯故事では、「覡司」が真鶴を率いて、ムルチへ言ったことが記されている。ここでは、「時の大屋子」を「覡司」と記している。「おもろさうし」によれば、「時の大屋子」は「きやのちぬきまる」と称し、「時を司るかんなぎの名称」［池宮　1995：p174］であった。王府は、1728（雍正 6）年「時よた科定」を施行し「時之大屋子」を廃止した。高良倉吉は「時よた科定」による「時の大屋子」の廃止について、「トキ・ユタ的観念を王府が最終的に除去した」［高良　1985：p79］としている。

玉城朝薫が創作した 1719（康熙 58）年当時には、「時の大屋子」が存在していた。「孝行の巻」は高良の言う「トキ・ユタ的観念」がある時代に創作されている。それにより「時の大屋子」という登場人物は琉球王国の祭祀に関する独自の存在であったことがうかがえる。

組踊台本の卜書きでは、演出することが難しい天候や蛟の長さの描写が以下の通り記されている。［伊波　1928：p285］

附、此時蛇狂ひ出、仕舞有時に、天より星下り、四ツに割れ、童のすがたあらはれ、手に孝感滅蛇といふ四字の旗揮り、顯れ給へば、急ち蛇體皮肉分散して滅す。但南表の幕二幅目裂け出す。

南表の幕から蛇が踊り出るように登場すると、天から童が降りて、童が現れて四字の旗を振るうと、蛇が皮肉分散するという。一方、演戯故事の生贄の儀式では、童でなく「南斗の寿星」が登場している。ここで寿星は、中国では人の「生」を象徴する吉兆の星とされ、長寿の意味があることから老人の星をさす。このため、演戯故事ではおそらく老人であったのであろう。このように天から降りてきたのは、台本と演戯故事との間で違いが見られる。なぜこのような違いが現れたのかについては、今後の課題としたい。

さて、こうした演戯故事と中国の故事との関係について［劉富琳　2001］は「孝行の巻」と『搜神記』に記されている「李寄斬蛇」の故事が類似していることを指摘している。また［劉守華　1995］によると、福建と台湾における蛇に関する故事において「李寄斬蛇」以前には蛇と人間の女性が婚姻すると災いを収まるとした「怪力乱心」が知られていたという。しかし、「李寄斬蛇」は勇猛果敢な女児が蛇に立ち向かい村の危機を救うという故事、よって「怪力乱心」は蛇と人間の女性が婚姻するといった故事で儒教倫理に繋がる「孝行」へは発展していない。

組踊「孝行の巻」の創作については、王国時代に琉球士族によって能が演じられていた点も踏まえると、これまでの研究で指摘されているように、謡曲や古浄瑠璃の影響を受けたと捉えた方が良いだろう。しかし、演戯故事の内容となると、上記のような「不徳」や「孝行」といった儒教倫理や南斗の寿星といった中国的な天象表現が随所に表出し、冊封使を意識した演出が多くみられる点に着目しなければならない。

まとめ

以上、冠船芸能における組踊「孝行の巻」に関して、演戯故事や組踊台本の詞章との内容比較を中心に、その時代背景や儒教倫理及び演戯故事に見られる歴史的な演出意義等について考察してみた。

まず、演戯故事の冒頭の文章と組踊台本の詞章から比較した。演戯故事では組踊で登場しない義本王が登場し、義本王の風水害による不作に対する為政者としての国家の安泰や穀物の豊作をすることが出来ない「不徳」（自責の念に堪えきれない）の心情まで記されている。台本にはない時代設定をし、そして中国の伝統的な為政者の儒教倫理をあえて演戯故事に書き込み、それを冊封使に演出して見せるのは、どのような意義があったのであろうか。

これまでの研究では、こうした組踊が冊封使を歓待する七宴等で演出された意義について全く言及されてない。組踊「孝行の巻」が演じられた時代、中日の両属下において、王府は琉球王国の中国化政策を推し進めていた。王国を幕藩体制化における異国として位置付けていた薩摩も、そうした王府の中国化政策を許容していた。組踊「孝行の巻」は、そうした時代において演出された中国的な戯曲の要素も取り入れた冠船芸能であったという点に着目したい。冊封使は中国を中心とした東アジアの冊封体制下において派遣された使節である。

中国における冊封は二種あり、一つは「領封」もう一つは「頒封」である。「領封」は冊封使を派遣せず、中国国内で属国から派遣された使節に「勅書」を渡す冊封儀礼で、「頒封」は直接冊封使を属国に派遣し、王位即位の式典を自らが取り仕切り、直接新国王に勅書を手渡す冊封儀礼である。

中国は重視する属国に対しては一貫して「頒封」を行っていた。歴代の琉球国王は全てそうした「頒封」を受けている［金城正篤　1998］。豊見山和行は琉球が「頒封」を維持するための一つの戦略として、儒教のイデオロギーが琉球に導入されていることにより、皇帝の徳化を被る朝貢国としての存在を示そうとしたと指摘している［豊見山和行　2004］。このため、冊封が実施される度に、王府は常に琉球が宗主国中国に対して中国文化を受容した恭順な属国であるかを示すことに意を尽くし、冊封は王府にとって重要な政治儀礼となっていた。

中国もまた、冊封体制下において、属国に対しては中華世界の「大同」、つまり中国の儒教倫理の浸透を強く望んでいた。組踊はそうした時代背景のもとで創作された戯曲であることに、まず留意しなければならない。

本稿では、時代背景や儒教倫理及び演戯故事に見られる歴史的な演出意義を考察したが、上記の論点は、そうした視点にたって言及したものである。冊封使歓待のための組踊の上演には、戯曲を通した属国琉球の中国化した社会を示す政治的なパフォーマンスが見え、組踊が単なる歓待芸能ではなかったことを、演戯故事の内容の検討によって窺い知ることができる。

【注記】

1）「田村」のあらすじは以下の通りである。

東国の僧（ワキ）・従僧たち（ワキツレ）が春たけなわの都を訪れ、清水寺へ着く。萩箒を持つ花守姿の童子（前シテ）は、僧の問いに答えて当寺の来歴を語り、あたりの名所の数々を教え、のどかな春をめでつつ、夕暮れとともに田村堂へと消え去る。清水寺門前の者（アイ）は僧に清水寺のいわれを物語る。夜半、僧の読経のうちに、坂上田村麻呂（後シテ）がありし日の武将姿で現れ、観音の法力をたたえる。（小林　西　羽田　2012：p563）

2）「大蛇」のあらすじは、以下の通りである。

素戔嗚尊（前ワキ）が従者たち（ワキツレ）を従え出雲の国へ着くと、庵の中で少女を伴い嘆き悲しむ老夫婦に出会う。名を聞けば少女は稲田姫（前子方）、そして夫婦は脚摩乳（前シテ）・手摩乳（ツレ）といい、すでに八人の娘を大蛇に呑まれ、この姫も免れるすべのないことを述べる。尊はこの姫を妻とし、大蛇退治を約束する。木葉の精（アイ）が出て、尊が大蛇退治をする旨を告げる。尊（後ワキ）は姫（後子方）・輿舁（ワキツレ二人）とともに、大蛇の住む川上へと向かう。尊は酒を満たした酒船八艘を川に浮かべ、姫を川岸にすえ、大蛇の出現を待ち受ける。そこへ、酒船に映る姫の姿を求めて大蛇（後シテ）が現われ、頭を船へ落とし入れ、酔い伏すところを尊が斬り伏せる。（小林　西　羽田　2012：p155）

3）「張良」のあらすじは以下の通りである。

張良（前ワキ）が夢の中で馬上の老人に沓を履かせ、老人は五日後の再会と兵法伝授とを約す。すなわちその日に当たり、張良が指定の場所へ行くと、すでに払暁から来ていた老人（前シテ）は張良の遅参を怒り、さらに五日後に約し立ち去る。張良の下人（アイ）はこれまでの顚末を人々に告げる。約束の日、張良（後ワキ）が深更から待つと、馬に鞭打ちつつ黄石公（後シテ）が近付き、いま一度張良の心を試すべく、履いた沓を川に落とす。急流に足を取られながら、張良は沓を追う。竜神（ツレ）が現われ沓を拾うが、張良が剣を抜いて迫ると、竜神は沓を差し出し、張良は沓を石公に履かせ、石公から兵法を伝える巻物を与えられる。（小林　西　羽田　2012：p581）

4）『中山世譜』巻三「義本王」では、災害に関する内容が以下の通り記されている。

就位之後。饑饉頻加。疫癘大作。人民半失。義本大驚。召群臣曰。先君之世。國豊民安。今予無徳。饑疫幷行。是天之所棄也。予要讓位于有徳而退。

【（義本王が）就位の後に、饑饉が頻発し、疫病が大流行し、人民の半分を失う。義本は大いに驚いて、群臣を呼び寄せて「先君の治世は、国が豊かで民も安らかであった。今、余は徳無く、飢饉と疫病が発生している。これは、天に捨てられたところで有る。余は徳のある者に譲位し退きたい」と言った。】（伊波　東恩納　横山 1962：p33）

5）『遺老説伝』外巻一では、屋良ムルチに関して以下の通り記されている。

北谷郡屋良邑之東山林尤深遠岩石甚巍峩内有一溪潭清澄徹底深淵萬功名仞名曰無漏溪割註昔有一大蛇時時翻波湧瀾放聲响喨或出來上岸與牛相鬪或半藏波裏半現雲間人不知其長也至于今世毎値風雨將起時潭波湧出怒聲大起轉與東海共合响響必也不閲數日風雨忽起云爾

【北谷間切屋良村の東の山林の奥に、雄大な一つの渓流がある。（水は）清く澄み、深くまで透き通っている名をムルチ（一名は寶溪）という。昔、大蛇がおり、時折騒がしく勢いよく声を上げ、出てきては牛と戦い半分波に隠れ、半分雲から現れている。その長さを知る人はいない。今の世は、風雨が起こる時に、池の波がたち、怒声が大きく怒り、必ず東海と共に響くと、（その様子を）見ずとも、風雨がたちまち起こるのみである。】（嘉手納宗徳編　1978：p45）

参考文献

・麻生伸一（2013）「近世琉球における災害・災禍と祭祀に関する一考察」『沖縄・奄美島嶼社会における災害・防災の歴史的変遷に関する包括的研究』、pp.70-78、沖縄。
・池宮正治（1995）『琉球古語辞典　混効験集の研究』第一書房、東京。
・犬飼公之（2004）『琉球組踊　玉城朝薫の世界』瑞木書房、神奈川。
・伊波普猷（1929）『校註琉球戯曲集』春陽堂、東京。
・伊波普猷 東恩納寛惇 横山 重編（1962）『琉球史料叢書』井上書房、東京。
・大城 學（2000）『沖縄芸能史概論』砂子屋書房、東京。
・嘉手納宗徳編（1978）『球陽外巻　遺老説傳』角川書店、東京。
・加藤常賢（1983）『書経』上、新釈漢文大系第25巻、明治書院、東京。
・金城正篤（1998）『沖縄から見る中国―歴史論集』沖縄タイムス社、沖縄。
・国立劇場おきなわ調査養成課編（2007）『国立劇場おきなわ上演資料集〈十一〉孝行の巻』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、沖縄。
・小林 責　西 哲生　羽田 昶（2012）『能楽大辞典』筑摩書房、東京。
・周煌「琉球国志略」（1757）『國家圖書館藏琉球史料匯編』中、北京図書館出版社、北京。
・徐葆光「中山伝信録」（1721）黄潤華 薛英編『國家圖書館藏琉球史料匯編』中、北京図書館出版社、北京。
・末吉安恭（1929）「組躍小言」伊波普猷『校註琉球戯曲集』pp.730-757、東京。

・高良倉吉（1985）「首里王府とトキ・ユタ禁圧―近世琉球におけるユタ問題の構造」『沖縄史料編集所紀要』第10号、沖縄県沖縄史料編集所、pp.70-94、沖縄。
・独立行政法人日本芸術文化振興会　公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団編（2014）『国立劇場おきなわ10年誌』公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団、沖縄。
・豊見山和行（2004）『琉球王国の外交と王権』吉川弘文館、東京。
・仲吉良光（1972.6.21）「文化財保護に全力を　組踊の伝統を重んぜよ」沖縄タイムス、5面
・畠中敏郎（1976.7.22）「組踊と大和芸能―孝行之巻を例として」沖縄タイムス、5面
・「戊戌冊封諸宴演戯故事巻之六」（1838）尚家文書第126号。
・真境名安興（1929）「組躍と能樂との考察」伊波普猷『校註琉球戯曲集』、pp.679-724、東京。
・矢野輝雄（2003）『組踊を聴く』瑞木書房、神奈川。
・劉守華（1995）「閩台蛇郎故事的民俗文化根基」『民間文化論壇』中国民間文芸家協会、北京。
・劉富琳（2001）『中国戯曲与琉球組舞』海峡文芸出版社、福州。